「耕す人」
1855-56年ごろ、エッチング、紙
22・0センチ×32・0センチ

ジャン＝フランソワ・ミレー

（1814～75年）

名画の扉

大川美術館コレクションから

革命後の19世紀フランスでは、資本主義の隆盛、民主主義や社会主義の思想的潮流も生まれた激動の時代でした。絵画においてもそれまで最高位とされた歴史画に対し、クールベやミレーを中心に、風俗画や肖像画といった卑近な対象を描く「リアリズム」がおこりました。

ブルジョア生活ではなく、労働者や家庭における姿、休息の姿など都市や農村の生活の全体が美術の主題となり、リアリストはしばしば政治的な誤解を受けますが、その関心は同時代の現実、人間存在を根本から捉えようとするところにありました。

農家に生まれたミレーは「農民の題材は私の気質に最も合っている」と語るように、とりわけ農民の姿を描きました。本作は手前に人物を大きく描くダイナミックな構図。2人が少しずつ手仕事で耕す後ろには広大な土地が広がり、その仕事の途方のなさもにじみます。

次回のコレクション展で展示いたします。

（大谷）